

声と女の悲鳴が響いて離れず、途切れない。

暗い穴の底に落ちこんでいくような感覚に手を伸ばすのだが、伸ばした腕は醜く腫れあがり、腐って黒ずんで崩れ落ちた。

(……おかあさん、たすけて……)

エレは悪夢の中で、必死に母を呼んでいた。なのに、顔を思い出せない。

(ごめんなさい。わたしのでいで、おかあさん……)

うなされ続けていたエレだったが、葉湯が効いたのか、深夜をむかえるころには熱が下がった。寝息も安らかなものにかわり、シエルツとザックも安堵した。

翌日。

「今日は休んで、よくなったら明日出発しよう」

そう言い残して、シエルツがザックとともに出かけていったのは昼近くだった。医者と呼ばれたのだ。

エレは、慣れない旅の疲れも出たのか午前中のほとんどを眠ってすごしていたが、ふたりが出かけたあとは目がさえてしまった。昨日のできごとを思い出しては、後ろ向きな想いにまとわりつかれていたのだ。

——全てのものに、役割がある。

牧師の說いていたこの言葉が、エレの希望だった。醜痕が不幸を呼んで母親を死なせたかもしれない、という自責

の念を打ち消すことができた。

シエルツから隠れ里のことを聞いたとき、自分の役割を見つけたのかもしれない、と思った。重い病の人々の力になれるのなら、それ以上の役割があるだろうか、と。

だが、決めきれずにいた。心の隅に、ぬぐえない不安と恐怖があつたからだ。

醜痕と蔑まれてきた自分よりも、さらに忌み嫌われている人々とは。狭い世界しか知らないエレにとつて、それこそ想像もつかないものだった。それを、垣間見た。

女の腕から、だらりと垂れ下がっていた黒ずんだ肉塊。思い出すたび、鳥肌がたつ。

さらにひとつ、気になって頭から離れないことがある。ほかでもない、シエルツとザックのことだった。

毛布から顔を半分出し、天井板を見つめる。

川辺でのザックの厳しい態度と、そのあとのふたりのやりとり、胸がおされるように息苦しくなる。

シエルツの胸倉をつかんだザックは、亡くなった母を抱いて肩を震わせていた父の姿を思わせた。

父は、母が大切だったのだ。その母が愛し、大切にしてきたからこそ、エレを見捨てきれずにいた。

ザックが大切なのは、シエルツだ。そのシエルツが、エレを連れていくと決めた。

ザックがエレに優しいのは、シエルツがいるからだ。そ